

Kanagawa Library Association

巻頭言 Every people for his or her book.	1
特集：神図協 この1年の動き	
地域資料委員会、大学図書館協力委員会	2
研修委員会、広報委員会	3
研修会レポート 拡大職員研修会 出版文化を支えるイベント	
「講演会 金原瑞人 本のワクワク」	4
連載：わたしのイチオシ 「反物目利作成の『切本帳』」	4

Every people for his or her book.

広報委員長 入船 康子

(横浜市立中央図書館 サービス課担当係長)

タイトルは、インドの数学者・図書館学者である S.R. ランガナタン (1892-1972) の「図書館学の五原則」のうちの第2の法則です——と、改めて書かなくてもいいですよ、という人もいらっしゃるかもしれません。

私が図書館司書として採用されてから 20 余年が経過しましたが、この間図書館はデジタルという名の大波を何度も受けてきていると感じています。小学生の時はブックカードに借りた人の名前と返却予定日を記載する貸出方式が、バーコード等での管理になりました。所蔵資料も目録カードからコンピュータによるデータベースになり、検索が可能になりました。インターネットの普及により、利用者自ら予約入力を行うことが可能になり、入力業務は減りましたが予約件数が飛躍的に伸びた図書館もあったと思います。また、本そのものがデジタル化し、自分のスマートフォンやタブレットを使って本を読むことができるようになりました。

こうしたデジタルの大波を受け、図書館に来館せずとも本が読める環境ができたとしても、「その人の本を」受け取っていない人がまだまだいらっしゃいます。図書館はこうした人たちに、どの

ようにアプローチしていくことが必要なのでしょうか。それは図書館が収集・保存・活用している「本」というものの可能性を、さらに探る必要があるのかもしれませんが。何故なら、デジタルの大波はデジタル教科書や電子黒板といった形で学校教育にも押し寄せており、ゆくゆくは図書館もその波を目前に迎えることなのでしょう。その大波を乗り越え、できれば華麗なジャンプもきめたいところです。

神奈川県図書館協会は、そのネットワークにより、「その人の本を」手渡すことを可能にするだけでなく、収集・保存・活用に関する研鑽を行っています。公共・大学・専門という館種を超えて次の大波に備え、そのネットワークにより「その人の本を」手にする可能性を更に広げていくことができれば幸いです。

余談ですが、“people”の部分が“reader”のバージョンもあります。敢えて“people”を選んだのは、これから読む人だけでなく、「読む」「知識を得る」以外の意義を本に与え、人とのつながりや地域の活性化といった、本や図書館の活用の幅を広げていく人に手渡せることができるよう、願いを込めてです。

地域資料委員会

地域資料委員会では、平成 27 年度から神奈川県内における地域資料のデジタルアーカイブの状況等を把握するため調査等行ってきました。平成 27 年度は、「デジタル化について」「デジタルアーカイブ構築時の状況について」「デジタルアーカイブ稼働後の運営について」「他機関との連携の有無」に関して調査票を作成し、神奈川県図書館協会加盟館へ発送しました。平成 28 年度は、その調査結果を集約するとともに、公共図書館、専門図書館、大学図書館の傾向について分析し、報告書にまとめたところです。

公共図書館に関しては、35 館のうち 7 館が資料のデジタル化を実施していますが、公共図書館、専門図書館、大学図書館の 3 館種の中では、資料デジタル化の実施率は最も低く、20 パーセントにとどまっています。

専門図書館に関しては、14 館のうち、デジタル化を実施している 7 館、計画している 1 館をあわせ、半数以上の施設が何らかのデジタル化を実施もしくは検討しています。

大学図書館に関しては、45 館のうち 15 館が資料のデジタル化を行っています。実施率は 33 パーセントです。

デジタル化に関しての課題、留意点については、各館ともセキュリティ、著作権といった提供に関する技術的な問題点、人と予算が限られることが挙げられています。

デジタル化の利点としては、資料を精緻にデジタル化することによりオリジナル資料へのアクセスの必要性を減らすことができるため、将来的に資料の傷みを最小限にすることが可能になるとともに利用者にとって公開やネットワーク等を通じた利用も容易になります。これからの図書館にとって重要なことですから、デジタル化やアーカイブの構築における神奈川県内でのサポート体制が必要ではないでしょうか。

[委員長 鎌倉市中央図書館 菊池 隆]



大学図書館協力委員会

大学図書館協力委員会は、平成 27 年度に神奈川県内大学図書館相互協力協議会が本協会に統合、発展的解消したことを受けて、大学図書館に関する調査・研究に加え、相互協力事業の推進を目的とし、平成 28 年度に運営 2 年目を迎えました。

本委員会は、平成 27・28 年度の調査研究テーマとして「相互協力の推進」を掲げ、平成 28 年度は、6 月、12 月、3 月の全 3 回の委員会を開催しました。

委員会では、神奈川県図書館協会の理事会や企画委員会の報告をはじめ、本委員会の構成や運営に関する意見交換を行う一方、各大学図書館における課題や問題等についての情報交換も行ないました。

特に、相互協力の柱であり、協力活動の簡素化へと繋がった大学図書館間の相互事業「神奈川県内大学図書館共通閲覧証」制度については、制度の利用に関する申し出に対応することも不可欠となることから、運用に係る手続き等の申し合わせ事項についても協議を進めています。

また、本制度の利用促進を図るための方策を協議した結果、本委員会においてチラシ原稿を作成し、各加盟館に掲示や配布等の協力を願い、利用者への周知を強化することとなりました。

大学が大きな変革を求められている昨今、大学図書館の役割は、ラーニングコモンズの整備や学習支援といった学生教育への積極的かつ直接的な関わりや、施設、情報等の資源、人材の活用を通じての地域貢献と広範に亘っており、まさに、大学発展のための重要な牽引力となっています。

本委員会では、前述のような大学図書館に求められる役割を果たすべく、課題にそった調査・研究を進めるとともに、神奈川県内大学図書館共通閲覧証制度の拡充についても、引き続き、協議を重ね、また、意見交換や共通認識を深めつつ、相互協力の推進と連携を図りたいと思います。

[委員長 鶴見大学図書館 鈴木 仁代]

研修委員会

研修委員会では、12回の研修会を開催しました。研修テーマ・講師、開催日は以下のとおりです。詳しい報告はホームページを御覧ください。

(<http://www.kanagawa-la.jp/>)

回数	研修テーマ・講師(敬称略)	開催日
第1回	「国立国会図書館東京本館」(施設見学)	6/23
第2回	「貴重書の保存と活用」床井 啓太郎(一橋大学社会科学古典資料センター)	7/15
第3回	「一橋大学社会科学古典資料センター」(施設見学)	7/15
第4回	「認知症の人に優しい図書館」小川 敬之(九州保健福祉大学教授)	7/29
第5回	「展示～視覚で伝える本の魅力」岡崎 礼奈、篠木 由喜(東洋文庫 学芸員)	9/13
第6回	「コミュニケーション・ワークショップ」平本 雅則(カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株))	9/27
第7回	「YAサービスの基本と実践」清野 愛子(相模原市立相模大野図書館)、笹原 悠(図書館流通センター)	10/20
第8回	第18回図書館総合展フォーラム「出版文化を支える～図書館・書店・出版社～」対談: 内野 安彦(常磐大学等非常勤講師) 成瀬 雅人(原書房代表取締役社長)	11/9
第9回	子ども読書活動推進フォーラム 「幼年童話のおもしろさ」 角野 栄子(児童文学作家) 事例発表: 県立津久井浜高等学校図書委員会、多摩区ストーリーテリング おはなし万華鏡	12/3
第10回	拡大職員研修会「金原 瑞人 本のワクワク」金原 瑞人(翻訳家、法政大学社会学部教授)	1/20
第11回	「大和市立図書館」(施設見学)	2/10
第12回	「国立国会図書館における録音・映像資料の利用及び保存について」鈴木 三智子(国立国会図書館 司書)	3/3

今年度の研修会は、国立国会図書館東京本館の見学研修から、視聴覚研修まで、全12回の研修会を開催しました。

多様な内容で開催でき、合計で855名の方に御参加いただきました。

研修会にあたりまして、会場提供や講師派遣などさまざまな形で御協力いただきました加盟各館並びに関係者の皆様に改めてお礼を申し上げます。

[委員 伊勢原市立図書館 鍛代 喜久男]

広報委員会

広報委員会では協会報の発行、ホームページの管理、図書館総合展でのブース展示を行いました。今年度の活動内容は以下の通りです。

1 協会報の発行(年4回発行)

年3回ほど開催される広報委員会のほかに、協会報の編集・校正等のやりとりをホームページやメールなどを活用しながら行うことで編集会議の回数を少なくし、質を落とさずに効率よく発行できるよう心がけました。

○255号(7月1日発行)

平成28年度神奈川県図書館協会総会報告
わたしのイチオシ「源氏物語扇面貼交屏風」
(鶴見大学図書館)

○256号(10月1日発行)

特集: 2016年度新規加盟館紹介
わたしのイチオシ「レンガ『ヨコスカ製鋳所』
銘入」(関東学院大学図書館)

○257号(1月1日発行)

特集: 第18回図書館総合展フォーラム報告・
ブース展示報告
わたしのイチオシ『『ハイランド』等柿澤篤太郎山岳図書コレクション』
(平塚市中央図書館)

○258号(4月1日発行)

特集: 神図協 この1年の動き
わたしのイチオシ「反物目利作成の『切本帳』」
(鶴見大学図書館)

2 第18回図書館総合展におけるブース展示

今年度は11月8日(火)から10日(木)まで、パシフィコ横浜で開催されました。神奈川県図書館協会のブース来訪者は3日間で延べ325人でした。

展示ブースでは、協会の紹介や各委員会の概要・活動内容をパネルで紹介するとともに、協会刊行物の展示や加盟館からの各種チラシ配布を行いました。なお、今年度は広報物として文庫カバーを作成して配布しました。裏面に印刷した加盟館分布図も好評で、県内にある図書館や協会の存在を広く知ってもらう良い機会となりました。また、来訪者からは協会の活動や加盟館について、さまざまな御質問をいただき、今後もより多くの方々にPRしていきたいと、この3日間を通して気持ちを新たにしました。

[委員 横浜市中央図書館 矢吹 紗綾子]

拡大職員研修会 出版文化を支えるイベント

「講演会 金原瑞人 本のワクワク」

(平成 29 年 1 月 20 日実施)

昨年度の第 18 回図書館総合展「神奈川県図書館協会フォーラム『出版文化を支える』」を受けて、「図書館・出版社・書店」の三者が協働し、「読む人を育てる」ための事業を拡大職員研修会として開催しました。今回は出版社の協力で講演の講師を招き、地元の書店が講師著作を販売、サイン会を実施。参加者も協会会員のほか一般の方にもご参加いただきました。あわせて、川崎市立宮前図書館の所蔵資料や、講演会で紹介される資料(県立図書館所蔵の貴重書)の展示、図書館と書店の連携事例の紹介も併せて行われました。

講演は、翻訳家・児童文学研究家、法政大学教授の金原瑞人氏を講師として招き、本を読むということについて、昨年の野菜の高騰の話からアイルランドのジャガイモ飢饉へ、さらには中南米原産のジャガイモ・トマト・トウガラシが、どのようにして多くの国で食べられるようになっていったのかという、食文化の話から始まりました。

そのジャガイモ飢饉が起こった 1849 年といえは 49ers、その時ゴールドラッシュのカリフォルニアではジョン万次郎も金を採掘していたという話から、

『英米対話捷徑』『英和通弁手引草』『和英語林集成』を紹介。さらに、文字の縦書き・横書きについての話へと続きました。

アラビア文字やヘブライ文字、蒙古文字などの画像を見ながら、扁額に書かれているような右から左への横書きに見えるものが、実は 1 行 1 文字の縦書きであること、現在は左から右への横書きが大半を占め、教科書も国語以外は横書きになっているが、小説は縦書きが基本であることなど、日頃あまり気にすることは無いが、言われてみればなぜなのか改めて考えさせられるようなエピソードの紹介がありました。

読むことは、「本」と「自分」という異文化の衝突であり、そのぶつかり方は読者によって違うので予想がつかない。本は読み手がいかようにも受け取り方を変えられるものだが、中にはそれを許さない作品もあり、それが読み手の内面に格闘を呼び起こすこともあり、異文化度が高いと格闘も激しくなり、そこが魅力ともなる。異文化を越えたところに感動があるので、若い(と思っている)うちに、ぜひ海外文学に挑戦してほしい、と話を結ばれました。

(神奈川県立川崎図書館 木村 美保)

連載 わたしのイチオシ 反物目利作成の『切本帳』 (鶴見大学図書館)

いわゆる鎖国下の日本において、唐船(中国船)・オランダ船が長崎に持ち渡った輸入品は、各種の手続きを経た後、日本側の役人である目利によって鑑定・評価され、国内市場にもたらされました。輸入反物に関しては、反物目利と呼ばれる役人によってその職務が果たされました。この反物目利によって輸入反物の裂を貼り込んだ切本帳と称する史料が作成されています。

本学が所蔵する切本帳のうち、ここに掲げた「西式番船・同三番船・同四番船 本方切本帳」は、嘉永 2 年(1849)に長崎港に入津した唐船 3 艘(南京出港船)が持ち渡った反物の切本帳です。この切本帳は、輸入反物の荷物改めの際に、後の覚えとして作成されたもので、主に価格評価のためであったと考えられます。

また、本学には「御用御詔切本」と称する反物目利作成の切本帳が所蔵されています。この史料は、オランダ船に対する将軍(名目)の注文品である御用御詔物としての反物の内、入用分を除いて、文

政 7 年(1824)から天保 7 年(1836)にかけて取引にかけられた反物の裂を貼り込んだ切本帳です。作成の主目的は、長崎会所で五ヶ所商人等を相手に取引にかけの際の手元資料とするためであったと考えられます。

これらの切本帳に貼られた裂類は、端切れではありませんが、近世日本にもたらされた各国・地域の染織品を今に伝える貴重な実物史料といえます。

(鶴見大学文学部教授 石田 千尋)



「西式番船・同三番船・同四番船 本方切本帳」